

中国生まれの音読みと日本生まれの訓読み

漢字の読み方には普通「音」と「訓」があります。「音」は、漢字が日本に取り入れられたときの中国読みのことであり、「訓」は、その漢字に当たるわが国固有の言葉のことです。

「花」という漢字を例にとると、「音」と「訓」の読み方は次のようになります。中国では「カ」と読むので、「カ」が音読みとなります。「花瓶」^{かびん}「花壇」^{かだん}という使い方がこれです。

わが国では、意味としては「はな」という言葉に当たるので、「花」を「はな」と読むようになりました。こうして「はな」という訓読みが生まれました。「花祭」^{はなまつり}「花見」^{はなみ}という使い方がこれです。

ところで、中国は、広さからいえばヨーロッパ全体に匹敵するほど、広い国土の国です。そのため、同じ漢字でも、地域によってはずいぶん違った発音をします。

また、漢字は長い年月をかけて日本に伝わってきましたから、時代による発音の変化もあります。わが国に入ってきた時代によって、「漢音」^{かんおん}“呉音”^{ごおん}“唐音”^{とうおん}という区別をしています。

漢音は、わが国が中国と正式に国交を結ぶようになって、唐の国都長安の標準的な発音を取り入れたものです。呉音は、中国と正式な国交を結ぶ以前、仏教などの教典とともに取り入れた、揚子江の下流地方(呉と呼ばれる)の発音です。そして、唐音は、唐よりずっと後、明・清の時代の発音です。これを唐音と呼ぶのは、中国人のことを“唐人”^{とうじん}と呼んでいたためです。

「京」「丁」「明」「行」という漢字の読み方について、漢音・呉音・唐音の順に紹介すると、「京」は“ケイ・キョウ・キン”、「丁」は“テイ・チョウ・チン”、「明」は“メイ・ミョウ・ミン”、「行」は“コウ・ギョウ・アン”という発音になります。

このように一つの漢字にいくつもの音読みのあることがあります。

また、一つの漢字が、わが国のいくつかの言葉に当たる場合もあって、そのときは一つの漢字がいくつもの訓読みをもつようになりました。

たとえば、「下」という漢字は、「地下」^{ちか}の“か”と、「下水」^{げすい}の“げ”という二つの音読みと、「下町」^{したまち}の“した”、「川下」^{かわしも}の“しも”、「下る」^{くだ}の“くだ”、「下げる」^さの“さ”、「下」^{もと}の五つの訓読みというようにたくさんの読み方

をもっています。

さらに、多くの漢字は、二つ以上が組み合わせられ、熟語として使われます。普通、二つの漢字が組み合わさってできた熟語の読み方は、上を音読みにすれば下も音読み、上を訓読みにすれば下も訓読みということになります。

なお、次のような熟語については、音読みと訓読みの二通りの読み方があります。

音読みと訓読みとがある熟語の例

上下(ジョウゲ・うえした)、父母(フボ・ちちはは)、水車(スイシャ・みずぐるま)、年月(ネングツ・としつき)、山道(サンドウ・やまみち)、音色(オンシヨク・ねいろ)、春風(シュンプウ・はるかぜ)、荒野(コウヤ・あれの)

さらに、音読みと訓読みでは、意味の違う熟語もあります。

音読みと訓読みでは意味の違う熟語の例

小刀(ショウトウ・こがたな)、根元(コンゲン・ねもと)、市場(シジョウ・いちば)、頭数(トウスウ・あたまかず)、勝負(ショウブ・かちまけ)、燈火(トウカ・ともしび)

ところで、古くからの習慣で、「^{ジュウバコ}重箱」のように「上が音読み + 下が訓読み」のものや、「^{ユトウ}湯桶」のように「上が訓読み + 下が音読み」のものもあります。俗に、前者のような読み方を「重箱読み」、後者のような読み方を「湯桶読み」といいます。

重箱読みの例

ヤクバ ^{ダイどころ} 役場、^{ソウキ} 台所、^{ソウキ} 雑木

湯桶読みの例

^{ミホン} 見本、^{バショ} 場所、^{クミキョク} 組曲

以上、述べたような漢字の読み方についての説明は、子供から質問のあった場合に答えてやれば良いでしょう。実際には、読み方をそのまま教えることで、子供に無理なく受け入れられるはずです。それよりも、小学校低学年ぐらまでは、反復して学習することを好みますから、読み方を完全にマスターするまで、同じ漢字をくり返し読む機会を多くしてやるのが大切です。